
ゼロの使い魔 ～異世界奔走記～

貧ジャック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔 ～異世界奔走記～

【Nコード】

N9753Y

【作者名】

貧ジャック

【あらすじ】

シャイターの門が武器を調達した際、人間も調達してしまったようです。この二次創作は地球から飛ばされたオリ主が異世界で奔走するお話です。筆者は初心者かつ初投稿です。誤字等ありましたら教えてください。拙い文章ですがよろしく願います。

第零話 リクルートは空に舞う(前書き)

初投稿です。よろしく願いいたします。

第零話 リクルートは空に舞う

〜アジア某国某街にて〜

私はとある会社員兼研究者、理由^{わけ}あつてこの街を訪れている。

つい先ほど、企業から連絡があり、急ぎ身支度をしている。相手先が急遽、予定を変更してきたとのことだ。

「やれやれ、ホテルにチェックインして、早々にチェックアウトすることになるとは思わなかったな」

愚痴をいいながら、長年愛用しているスーツに身を包み、心を入れ替えるため鏡に向かつて営業スマイルの練習をする。

「……誰がどう見ても悪人の笑みです、本当にありがとうございました。まだまだ訓練が必要だなこれは。」

兎に角、これで心の切り替えができた。資料やノートPCなどの手荷物をアタッシュケースにまとめて、部屋を出る。相手は既にエントランスで待っているとのことだ。急な予定変更とはいえ、これ以上待たせてしまつては相手の心証を害してしまう。

「こんにちは、織田義昭^{おだよしあき}さん。お会いできて光栄です」

エントランスに着いて直ぐに、丁寧な日本語を話すビジネスマンに話しかけられる。金髪で角刈りの中年美丈夫^{ナイスミドル}、そして珍しい月目^{オッドアイ}うん、写真で見た人物だ。実にダンディな雰囲気醸し出している彼が、クライアントの指示した相手、チェザレ氏で間違いなさそうだ。

「こちらこそ、お会いできて光栄です。チエザーレさん」

まずはお互いに握手を交わす。すると彼は、まるでお手本のよう
な満面の笑みで……

「早速ですが織田さん、貴方をマフィアから保護させていただきま
す」

「は？」

FBIの証明書を見せながら、実に物騒な言葉を吐いた。
バッチ

〈 原作 ゼロの使い魔 〉

私……いや俺こと、織田義昭は追いかけている。

鬼ごつこの相手は、絵に描いた様なゴロツキ共が10人以上。最
初は人種も姿も違う、まったく関連性の無い連中だと思っていたが、
素人の俺にもわかった事がある。

一つ、奴らは皆、拳銃やら刃物やらで武装している者ばかり、つ
まり堅気の間人達ではないこと。

二つ、そんな物騒極まりない奴らの目標が俺であること。まあ、
俺の荷物が目的なのかもしれないが、どっちでも同じこと、鬼に捕
まれば確実に酷い目にあう。

炭酸一気飲みしたらゲップがでるくらい確実だ。

パパパン！

バンツ！バンツ！

「うおっ！？畜生、撃つてきやがった！」

逃走劇開始からおよそ数十分、連中は痺れを切らしたのか発砲してきた。一発も俺に当たっていないのは威嚇射撃だからなのか、はたまた連中がへボなのか。・・・できれば後者であってほしい。いやホント、マジで。

「HEY！ビビってんならそのまま止まっちまえよ！」

汚い英語で喋るな聞き取り辛い、あとこの状況で止まるバカはいないだろ、と心の中でツッコミつつ裏路地からメインストリートへ抜ける道へ入る。街の地理を覚えていて向かう目的地も明確だが、こんな場所を逃走経路に選び延々と走り続けるのはバカか阿呆かドMだと思う。

もっとも、逃げつつも相手のセリフを聞き取ろうとする俺はバカか阿呆に分類されるんだろうな。

） 異世界奔走記 ）

ホテルでの一連のやり取りの後、FBI犯罪捜査官のチェザーレさんとその仲間に連れられ車に乗る。

「ここは危険な街だから」
イカれた

そう言いつつ、万が一に備えてと、仲間の居場所を記した手書きのメモを渡される。しばらくメインストリートを通っていたが、途中で事故が起きており通行止めされていたためサブストリートへ迂回する。ここまでは何事もなく問題なかった。問題は何故俺がマフリアに狙われているのか疑問に思い、チェザーレさんに問いかけようとしたその時だ。

前方の護衛車が月面宙返りアポロよろしく盛大に吹っ飛んだ。

鬼ごっこ開始の合図は爆音だった。

〕 第零話 リクルートは空に舞う 〕

バンバン！

タン！タン！

ガガガガガ・・・

襲撃してきたのは黒いスーツで身を固めた男たちだった。銃撃戦の中、俺はチエザレさんに護られ車の陰に隠れていた。しかしこの人、二丁拳銃使いとは。乱戦にも関わらず命中率が恐ろしく高い、それも相手の急所へだ。跳弾でヘッドショットとか・・・これがチルトという存在か。

「織田、銃は使えるな？」

「は、はい」

急に呼び捨てで話かけられ、緊張で声がどもってしまった。そんな俺を見たチエザレさんは落ち着けと言いつつ、おもむろに拳銃をホルダごと渡してきた。ご丁寧に予備のカートリッジを添えて。護衛対象の俺に拳銃を渡すのはどうかと思っただが、一緒にいたFB Iは全滅、少しでも戦力が欲しいのだろう。俺が訓練を受け拳銃の心得がある事を彼が知っていたのは、事前に調べていたのだろうと勝手に納得していた。

しかし半素人が参戦しただけで状況が変わるわけがない。結局、チエザレさんは黒服共の注意を引きつけつつ、メモに書いてある場所まで逃げると言い放ち俺だけをこっそり裏路地へ逃がしてくれた。

だが、逃走途中で追っ手らしき男に見つかり、後は襲われるがまま、流されるまま。気づけば裏路地で十人近い男共に追いかけていた。・・・途中まで俺を護ってくれていたチエザーレさんは無事なのだろうかと気になったが、まずは自分が逃げ切ることを考えるのが先だと無理やり思考を変えた。

そんな中、路地の三つ隣がメインストリートだと気づき、少しでも人目のつく場所で逃走したほうが良いのではと考え、現在に至る。

連中が他の足を用意している可能性もあったが、人目につけば他のFBIが探しやすくなるだろうし街の警察機構も対処してくれるかもしれないという、かなり運頼みな算段だった。・・・当然、そんなに世の中甘くない。

「イイ尻ケツの男でも、流石にここは通せねえぜ」

メインストリート手前でガチムチ工事夫共に行く手を遮られた。よく見ればこいつらの左脇も不自然に盛り上がっている。ってことは事故のため通行止めつても奴らの仕業だったか・・・

・・・ちなみに俺は、こと日本という国において不細工と呼ばれる面構えだ。中肉中背でガタイもそんなに良くない。ゆえに、ガチムチ野郎のセリフはきつと冗談だ、冗談であってくれ、冗談でなければ命以外の大切なナニかが・・・

「ここがお前のデットエンドだ！もう救援は来ないぜ？」

裏路地を走り回っている間に増援を呼ばれていたようだ。最初の倍ぐらい人数がいる。前も後ろも大勢の野郎共で囲まれた。

「いい具合にハマったね、後は神様にお祈りでもするよろし。ボンクラは仏教徒アルか？」

いや、野郎だけじゃなく、何故かチェンソーを持ったゴスロリとか、刃物を持っていたいかにも中華風の姉ちゃんとか、色々と危ない女性が数人いた。すげえシユール・・・って、何を呑気に考えているんだ俺は。

「まだだ、まだ終わらんよ！」

余計な思考をカットして行動に移る。貰った銃をガンホルダーから取り出し発砲、威嚇をしつつ横にある建物の非常階段を登る。俺には人を殺すなんて覚悟はまだ持てそうにない、威嚇射撃が限界だ。

「お、あいつ銃なんて似合わねえ物、持ってやがったぜ？じれってえ、こつちも撃つか」

「おい、馬鹿やめろ！・・・運がいいな日本人、面倒くせえが、てめえは五体満足で連れてこいって依頼だ」

五体満足が条件とはいえ、もし相手に当てていたら手足の一本や二本は撃ち抜かれていたかもしれない、奴らなりの正当防衛ってことで。

とはいえこの捕獲条件は俺にとって大きなアドバンテージだ。連中は無暗に俺を傷つける事は出来ない。ならば、追いつかれない限り逃げ続けることができる。建物に入っても屋上を飛び移ってでも何をしてでもFBIがいる場所まで行くことができれば俺は助かる。そうとも、行けるさ！必ず俺はイける！

「無駄無駄、さっさと諦めな」

「いやあ、悪あがきする男もわるくねえな」

「トミ！トヤネナマタルオドエ！」

・・・二人目からの発言はスルーで。5階建ての階段、残り2階分登れば屋上だ。ちなみに、非常階段の扉は無情にも開かなかった。ちくせう、開けとけよ非常口ぐらい。

「あいや、もう面倒ね。全身打撲ぐらいなら問題無い違うか？」

まてなんか今、不吉な片言英語が・・・

ガキユ！ガキユキョン！

め、目の前で起きていることをありのまま話すぜ！中華女の投げた鋼線付きナイフ - ククリナイフのような物 - がまるで生き物の如く蠢き階段を切り裂いていく、俺を避けて鉄製の階段だけを・・・
つて!!!？

「なにいいいい!!!？」

こんな状況、誰であろうと叫んだはずだ。急ぎ何かに捕まるうとするが、右手にアタツシユケース、左手に拳銃、ダメだどちらも手放すことができない、いやでも・・・などど考えているうちに階段が完全に崩壊する。

足場を失えば、後はニユートン先生の出番です。途中、スーツの上着が残った階段の残骸に引っかかるがもはや勢いは止まらない。上着が剥がれた拍子に力が加えられ、大地と蒼天を交互に仰ぎながら落ちる、つまり絶賛回転落下中。

「はいはい、これで鬼ごっこは終わりよ」

さらに中華女はもう一本の鋼線付きナイフを巧みに操り、そのワイヤーを俺の体に巻きつける。周りのゴロツキ共は歓声やら罵声やら叫んでいるが、俺は聞く耳を持つ余裕が無い。突如起こった目の前の現象に思考を奪われたのだ。

青黒青黒と交互に代わる視界が急に青緑青緑と変わっていったのだ。

そして・・・俺の体と意識は・・・緑の光に飲み込まれていった。

「お、おい。野郎消えたぞ!？」

ナイフ一本釣りで落ちてくるはずの男が忽然と消え、一瞬ゴロツキとマフィア達は愕然としていたが、次第にざわめき言い争いが始まった。

「おい、片言女ひことめ！てめえ奴を何処に隠しやがった！？」

「馬鹿言うな尻軽女！ワタシにもわからないよ！」

「ちつ、稼ぎ損ねただけじゃねえんだ、どうすんだよこの始末！？」

ぎゃあぎゃあ言い争う女共を尻目に、男娼屋のような男が、落ちてきた鋼線を手に取りまじまじと見つめる。

「ワイヤーが途中で切られてる。恐ろしく綺麗な切断面だね」

跡に残るは切り裂かれた階段とスツパリ切れた鋼線、そして路地の宙を舞うスーツの上着だけであった。

第零話 リクルートは空に舞う（後書き）

物語のヒント

織田義昭

本二次創作のオリ主。

見た目はキモくはない、しかし表情が怖い。

笑ったその顔は・・・察してください。

射撃の腕前は・・・お察し願います。

彼の境遇は次回。

チエザレさん

本名 ガウン・チエザレ

FBIの犯罪捜査官。

ある事件の捜査でオリ主がマフィアに狙われている事を知り、仲間と共にオリ主を保護する。FBIが誇る天然チート。数の暴力により生死不明、生きているといいですね。

危険な街

某国にある悪の楽園ロア プラ。

DM

ドレッドノート級マゾヒストまたはドレッドノート級マゾヒズムの略。

肉体的精神的苦痛を他者から与えられることによって、または羞恥

心や屈辱感から、極度の快感を得る者を指す。
場合によって変質者扱いされるので注意が必要。

ガチムチ

筋肉質な人を示す言葉。男性だけでなく女性にも用いられる。
決してア、ー なことをヤル人物を指す言葉ではない。

鋼線付きナイフ

中華女の獲物。ククリナイフのような刃物に鋼線または紐を付け、
投擲時の軌道変更や後の回収効率を上げている代物。熟練の捌きが
必須。

正式名称は筆者の勉強不足により不明。

緑の光

異世界への扉、ただし一方通行。
シャイターの門が頑張って開きました。

スーツ

オリ主の着ているスーツはリクルートスーツではありません。
でも露語が良かったのでリクルート扱いになりました。
そもそも筆者にとってリクルートの定義があやふやなことが原因。

第一話 目覚めは洞窟（前書き）

半分以上が回想です。

第一話 目覚めは洞窟

視界が全て淡い緑の光で包まれている。未だ覚めない頭を働かせ現状を確認しようとする。

ここは洞窟のようだ、大きさは劇場オペラハウスTVで見たことがあったぐらいか、それより少し狭いくらい。磯の匂いがあることから直ぐ近くに海があるのだろう。洞窟なのに明かりがあるのは何故だろうかとよく見れば、発光性のコケのような植物が岩に点在していた。

ここまで発光するのは珍しいもつと詳しく見よう、と起き上がるが思うように体が動かない。そして体中が痛い、特に体に食い込んでいる鋼線が。

「痛っ！・・・ああ俺、階段から落ちたんだった」

恐らくあの後、俺は連中に捕まりマフィアに引き渡され監禁場所であるこの洞窟に閉じ込められたのだろう。しかし体を拘束しているのは鋼線のみ、しかも簡単に解ほどけそうだ。

・・・？ここで少し違和感を感じたが、未知の植物がもたらす好奇心により”それ”は頭の外へと抜けていく。まずはナイフ付きの鋼線を解いて、詳しく観察する準備をしよう。愛用のアタッシュケースから道具を取り出しコケへと近づく。・・・あれ？

「なんで、俺のアタッシュケースがあるんだ？わざわざ律儀にマフィアが置いていったのか、いやまさか」

そんな優しいマフィアなんて存在するはずがない。再び湧いてきた違和感はどんどん大きくなり、好奇心を徐々に打ち消していく。そもそも刃物が付いたままの鋼線で、傷つけてはいけない相手を拘束し続ける意味が無い。ここでようやく近くにマフィアがいるか辺りを見渡すが、マフィアどころか人ひとり見当たらない。ふと右脇に手を添えると貰った拳銃のガンホルダーがある、予備のカートリッジが入っている状態で。急ぎ自分が倒れていた場所を見る。

「監禁する相手の武器を放っておくなんて・・・ありえない」

この時点で違和感は不安を孕んだ何とも言えない感情に押しつぶされる。現状はこう語っているのだ。その後マフィアに捕まらなかったし、FBIにも保護されなかった、第三者の存在すらあり得ない。

そこにはチェザーレさんから渡された拳銃、逃走の最後まで握っていたベレッタM92がコケの光を受け鈍く輝いていた。

〈 第一話 目覚めは洞窟 〉

とりあえず、何故”こんな事”になったのか、順を追って思い出そう。

俺の氏名は織田義昭、職業は会社役員兼研究員の24歳。彼女は・
・察してくれ。趣味は機械弄りと漫画そしてゲーム。左利きだが
箸を持つ手は右だ。あと、二人の弟妹ていまいがいる。

「織田と義昭って、滅ぼす側と滅ぼされる側が同居してるよな」

よく友人達に言われることだ。なぜ親がこのような名前をつけたのか息子の俺にも謎だ。まあ今更聞くのも野暮だし、何だかんだで結構気に入っている。ちなみに第二候補は無道むどうだったそうだ。どちらにせよ友人達の話の種になること受けあいだ。

「ほら、兄貴って何でも直して、何でも壊すじゃん？親父達には兄貴の将来が見えてたんだよ」

「よし兄にいは小さい時から皆に良い事を沢山して、たまに悪いことを平然とするでしょ？だから母さん達はそう名づけたのよ」

当時、中学生だった弟妹が、高校生の俺に向かって言ったセリフだ。

「あのな……。両親はそこまで考えていないぞ、絶対に。そして弟妹よ、お前達もなのか？友と同じく兄のガラスハートを粉碎するののか？」

年頃の弟妹は色々な意味で容赦が無かった。良くも悪くも俺に似てしまったか。

「よし兄のハートは分厚い鋼鉄でしょ？（言葉で）いくら叩いてもなかなか凹まないし」

「もしくはメタトロン。終末とか望みそうだし」

うん前言撤回、俺より容赦がないよお前ら。この頃から兄の威厳は消え失せていたんだな、ちくせう。

・・・思考が脱線した。今、思い出に浸るのは止そう。そもそも誰に自己紹介してるんだ俺は。

俺・・・いや私がああ街を訪れたのは大きなチャンスを手掴むためだ。

家族で経営している会社は利益の6割が2次産業、残りが3次産業の類だ。当社の格付け的中の下といった立ち位置で、経済協定の影響をまともに受け必然的に経営が苦しくなっていた。

そんな苦境の中、朗報が入る。以前、研究機関に依頼していたとある”成分” 新しい有機肥料の研究中に、社長（親父）が偶然発見したおそらく未発見であろう菌が生み出す成分 の抽出方法が非常に有効であると認められたのだ。その成分は有機肥料に使用することはできないが、医療関係者にとって新たな希望を見出せるものだったそう。

さらに国内の大手企業HIRAGAが、ぜひそれを国際特許として世界に認めさせるべきだと協力者として名乗り出てきたのである。様々な好条件と共にだ。ちなみに、当社はHIRAGAの傘下ということになっていた。社長がいつの間にか話を進めていたらしい。協力者になると近寄りつつ吸収合併、いやこれは一方的な吸収と言ってよいレベルだった。社長、せめて私や社員に相談して欲しかった。

たな。寝耳に水だったぞあれは。

そんな経緯を得て無事に特許を取得できたのだが、各国から”成分”に関する演説や抽出方法の説明を要求する声が後を絶たず、私はHIRAGAから各国の機関に説明する役割を与えられた。英語を再学習するのがめんど・・・時間がないため、発見者の社長が説明に歩けば良いのではないかと進言したが、

「父親には護衛と共に各地の演説に行ってもらおうよ。発見者に一大事があったら大変でしょ？君なら何かあっても・・・げふん、げふん、君なら父親以上に上手に説明してくれると思ってね」

大雑把に言っつてこんな感じに捉えることのできる説明をHIRAGAの重役から延々と言われ、却下となった。”成分”の抽出方法を見つけたのは私なんです、私には護衛をつけないんですか？そうですか。

・・・月夜ばかりと思うなよ？

そうして世界を奔走する中、企業から緊急連絡が入る。

「A国の大手製薬メーカーの重役が某国のとある街に滞在しており、そちらとの対談を望んでいる」

素直にチャンスだと思った。特許を認めても、いまだ保守的な姿勢を見せるA国。その大手製薬メーカーとなれば国内におけるシェアは計り知れない。取り入ることができれば弊社とHIRAGA、そ

して日本にとって大きな収入源となる。これは大チャンスだ。

しかし向かう街は治安の悪さで超が付くほど有名だった。しかも相手はその街から動こうとはしないようだった。万が一だが畏の可能性もある。私はH I R A G Aに相手の情報や街の地理などの資料を要求し、さらに護衛を依頼した。

そう、万全の態勢で臨んではずだったのだが、実際はご覧のありさま。あの街のマフィアに嗅ぎ付かれ、護衛してくれるFBIもろともホットな鉛でダンスを踊ったわけだ。もつとも、あの街に行く以前から狙われていた可能性が高いのだが……って、

「思い返しても、何でここに俺が居るか、全っ然わけがわからん！しかも携帯も圏外だし、洞窟の奥からグーグー音鳴ってるし、ぬわあああああああ！」

先の件でもそうだったが、一定以上の理不尽不可解が襲うと俺はとことんパニックになるようだ。軍隊でも入隊して訓練しなけりや当然だよなー、なんて思いつつ頭を抱えながらぐりんぐりん振り回す。もはや思考と行動が分離してしまったようだ。しかし、途中で自ら喋ったセリフにおかしな部分があったことに気付く。

「……グーグーと音が鳴ってる、だと!？」

そう、洞窟の奥、いやコケの光が一番弱い箇所から呼吸のような音が聞こえるのだ。よく耳を傾ければ呼吸の他に鼓動のような音も聞こえる。人では到底出せない、重い音だ。

何か人以外の生物がいる!？

直ぐに拳銃を取り残弾とセフティを確認し、構える。そして携帯の明かりを頼りに、ゆっくりと足を進め鼓動が何なのか確認しようとしたその時、

「いったい誰だえ？わらわの眠りを妨げる者は・・・」

あからさまに不機嫌で、そして深く腹に響くほど重く、しかしどこか優しさを含んだ声が”頭上”から響いた。恐る恐る見上げてみると、そこには・・・

「恐竜！？しかも喋ったと！！？」

見たこともない大きな恐竜（？）の顔が睨みをきかせていた。

第一話 目覚めは洞窟（後書き）

物語のヒント

ベレッタM92

イタリアのベレッタ社が開発した自動拳銃。

本編の拳銃はM92FSだが、オリ主は拳銃に詳しくないためM92と混同している。

誤作動が少なく、安価であり、どちらの利き腕でも使用できる。米軍でも正式採用されている。

織田信長

よく魔王扱いされる不憫なお方。ぶるあああああ！

戦のみならず統治においても、当時としては画期的な戦略、政策を行っていたとされている。

オダデインの威力は異常。

足利義昭

信長を利用して天下を取ろうとしたが逆に利用されて滅ぼされた將軍。

残念ながら筆者はその程度しか覚えていない。ゴメンネ。

オリ主の一人称”俺”と”私”

仕事と私生活を分けるよう、心がけているようです。

仕事は”私”で私生活は”俺”といった具合。

メタトロン

数々のゲームや物語に登場する夢の金属。

体内に取り込めば、人類の無意識と宇宙の意志を感じすぎて暴走すること間違いなし。週末を望んでいるのだ！。

国内大手企業 HIRAGA

発明家・平賀源内の子孫が創立したといわれる大企業。

おもに医療関係と製薬関係、精密機械の分野に進出、貢献している。

ぬわああああ！

最後の時まで息子に意志を伝えようとした男の雄叫び。

しかし本編の場合は混乱による錯乱の雄叫び。

恐竜

その巨体と風貌にあこがれる子供は数多い。

大人でもあこがれる。

でも実際に現れたらケツにツララを突っ込まれた気分になるだろう。

第二話 人と竜（前書き）

感想、アドバイス等ありましたらお願いします。

第二話 人と竜

目の前には寝起きの恐竜。しかも人語を話すときている。思わず腰を抜かさなかつた自分を褒めてやりたい所だ。拳銃を構えず一目散に逃げる。戦えば間違いなく食い殺される。

ありえない！ありえない！！ありえない！！俺にはその言葉しか浮かばなかつた。恐竜は六千万年以上も前に絶滅しているはずだ。あれは現代まで生き残つた未確認動物（UMA）だというのはか！？混乱しそうな頭を落ち着かせようと何度も深呼吸する。

「安心おし。人間を食べるほど悪食じゃないよ」

今度は子供をあやすような優しい口調で話しかけられた。離れていても目立つ白く輝く目に見つめられ、俺は思わず口を開いてしまふ。

「正直、食べないぞと言われても警戒してしまうんだが・・・」

一瞬きよとした顔になった恐竜だが、今度は口元を釣り上げて笑い出した。

「ふえふえふえ。随分と臆病な人間だね。何処から迷い込んだんだね？」

せめて用心深いと言ってもらいたいものだ。それはさておき、ずしんずしんと巨体を動かし恐竜は俺に近づいてくる。次第に恐竜の体に光ゴケの明かりが当たり、その全貌が明らかとなってくる。でかい、全長十五メートルはありそうだ。恐竜の頭にはサンゴのような角が二本生えており、全身は銀の鱗に覆われ光の加減で虹色に輝

いていた。

く 第二話 人と竜 く

人語を話す恐竜に敵意はなさそうなので、色々と質問をしたりされたりしていたのだが、どうやら事態は予想を遥かにぶつちぎって異世界まで到達していたようだ。

「おやおや、最初は気狂いの類かと思ったが、どうやら違うようだね」

「いやいや、散々話を聞いておいてそれは・・・」

酷いものだと言いたいが、こんな状況でお互いを理解するということも無理な話だ。しかしようやくこちらの事情を理解し始めたようだ。もっとも、こちらがこの”竜”こと海母うみははの話を直ぐに飲み込めたのは、諦め5割、好奇心3割、適応力2割という無茶苦茶な思考回路が成せる所業だ。海外を渡り歩いた俺の適応力に死角は無い。

「矛盾していないかえ？」

なんと、心を読まれた。何でもアリだなファンタジー。

ともかく、もっと詳しい情報が欲しかったため、俺は暫く海母うみの巢に居座ることにした。海母曰く、夜に騒がなければ居ても良い。あと

食糧は自分で調達しとのことだ。

「・・・寝ているところを起こしてしまって、すまなかつたな」

「なに、気にしとらんよ。わらわも久しく人間と会話できたしね」

まったく、彼女(?)が温厚で助かったといったところだ。

・・・数日後

先の海母との会話、そして今までの生活の中で、幾つか情報を仕入れることができた。

一つ、彼女は恐竜ではなく竜であったこと。しかも人語を理解し、更には”精霊の力”と呼ばれる魔法を行使できる古の竜、韻竜と呼ばれる存在だったのだ。

実際、目も体も疑った。魔法をかけた海水を飲んだら海の中で息が出来、しかもその効果は2時間以上も持続したのだから。その時の俺はヤックデカルチャーって顔していたと思う。

事のついでに潮風&防水対策として、海母に携帯食料を除く所持品全てに”不変”の魔法とやらを掛けてもらった。しかし海母はこの手の魔法は苦手らしく、一日毎に掛け直さないと効果が切れるそう。残念、恒久的な物質の保護はどの世界でも困難なようである。

ちなみに後で聞いた話だが、海母が俺の所持品を見た所でようやく俺を異世界の住人だと理解したらしい。

二つ、ここは月が二つある世界であること。洞窟を抜け漁に行った帰りに夜空を見て驚愕したのは記憶に新しい。洞窟に戻って海母にそのことを尋ねると、何を当然のことを言っているんだえ？といった具合で、かなり残念な目で見られた。ぐすん。

「いい年した坊やの嘘泣きは気持ち悪いねえ」

・・・すみません。

三つ目、この世界には人間の他にエルフや吸血鬼、羽翼人といった種族が数多く存在することだ。彼らは韻竜と同じく、“精霊の力”を使うことができるそうだ。つまり俺は人型の知的生命体は人間だけと思い込んでいたのだが、海母の話ではこの海域の先に広大なサハラと呼ばれる砂漠があり、そこにエルフが住んでいるネフテスという国があるそうだ。

なお、人間はサハラから西の方面と東の方面に分かれて暮らしており、人間とエルフとの関係は最悪とのこと。戦争でもやらかしたのだろうか？

四つ目、人間も魔法を使えるということ。ただし、韻竜やエルフ達が使う“精霊の力”と根本が同じだが精霊の扱い方が違うそうだ。

「わらわ達は精霊に願うことでその力を借りているのじゃが、人間は精霊に命令をして力を行使するのじゃ」

うん、ややこしい。そもそもこの世界に精霊なんて存在がいるんだな、初めて知ったよ。

「どちらか俺にとっては魔法のようなものだ。なら、俺は両方とも魔法ってことで理解するさ」

魔法を使える人間は限られていて、彼らはメイジと呼ばれ特に西の方面に多くいるそうだ。魔法使いとか・・・もしかしたらホグワーツみたいな学び舎があったりするのかもしれない。

そして5つ目、ここ辺り一帯の海域と土地には地球の武器・兵器が無造作に捨てられていることだ。時代と国に左右されることなく、そうまるで博物館のごとく。残念ながら使えそうな武器を見つけたのはできなかったが、ベレッタM92で使用できる弾丸が手に入ったのは大きな収穫だった。合計50発以上。もっとも使う機会が無いことを俺は節に願っている。物騒は嫌いだ。

日も暮れはじめた時間、たき火を起こし、魚を焼きながら色々と考察する。

「うーん、サハラ砂漠ってのを地球の地理に当てはめて考えると、西はヨーロッパ、東はアジアってところかな?・・・いかんいかん、もはや地球の常識は通用しないんだっ」

今日、見聞きしたことを思い出しながらメモ帳に書き込んでいく。日記のようなものだ。漁の腕前上達も重要課題だが、日々集めてい

る情報の整理もまた重要なのだ。未知の土地では情報の有無が命運を分ける。俺は地球に帰る方法を見つけるために、何れは”ここ”を旅立つつもりだからだ。もっとも、ここで帰る方法が分かるのが一番楽なのだが、今のところ収穫はゼロだ。

「おやおや坊や、今日の夕食は小魚一匹かえ？」

そんな事を考える俺を知ってか知らずか、海母は何時ものように俺をからかってくる。冷やかしはお帰りくださいと言いたいところだが、生憎と家主は俺ではなく海母だ。しかも毎日、所持品の保護を行ってくれる存在だ。ここはグツと堪える。

ちなみに海母の食事方法だが、本人曰く、

「口を開けて適当に泳げば魚で腹が満たされるよ。うらやましいかえ？」

だそうだが、まるでクジラのような食事方法だな。嗚呼、テラうらやまします。しかし、俺にとって初のサバイバルなんだ。簡単に、獲ったどー的な能力を手に入れることなど出来ない。誰でも最初の内は苦労すると思うけどな・・・

「長耳エルフのはねつかえり娘だつて精霊の力を使わず上手に捕っていたもんさ。坊やは泳ぎといい漁といい、よほどの不器用じゃないのかえ？」

うわ、酷い言いようだ。確かに泳ぎも漁も苦手だが、不器用ではないぞ。これでも機械整備が得意なんだ。ってか、エルフのはねつかえり娘つて、誰？

・・・ふとここでエルフについてまだ聞いていなかった事を思い出し、海母に尋ねてみる。

「なあ、海母。エルフはネフテス以外に住んでいないのかい？」

海母は少し間を置いてから、

「そうさね、殆どのエルフはネフテスに住んどるよ。ごく稀に抜出す者もいるが、本当に稀な話さ」

と答え、どうしてそんな事を聞くのかえ？と問うてきた。まあ、あまりにも唐突な質問だったからな。

「ああ、エルフがわざわざ過酷な環境の砂漠に住む理由があるはずだと思っただね。いくら精霊の力を借りられるとはいえ、もっと楽に暮らせる土地があるはずだろう？」

俺の話聞いた海母は目をぱちくりと驚いた顔をした。おや、意外と考えているんだね、といった思考を感じ取れる。なぜ直ぐに海母の考えが分かるかって？基本、海母は俺をからかってくるからな馬鹿にする時の表情を何度も見れば嫌でも考えが分かるさ。

しかし、一転して海母の表情が変化する。少し目を細め、暫く何かを考えているような素振りを見せた。なんだ、聞いてはいけない内容だったのか？何故か居たたまれない気分になった俺は、うつむきながら色々と想像を膨らませる。

「・・・確かにエルフにはサハラを離れられない理由があるよ。今

は西に住まう悪魔が起こした大災害、それを二度と起きぬよう起こさぬよう、監視しているんじゃないよ。何処を監視しとるかはおぼろしいがね」

海母の言葉に俺は思わず顔を上げる。見れば海母は遠い目で洞窟の天井を見上げている。うわ、これは地雷を踏んでしまったか？大災害と言うからは海母の家族も巻き込まれたのかもしれない。これは・・・流石に気まずい。

「す、すまない海母。まさかそこまで悲惨な話だとはおもわ「ふあふあふあ、何を勘違いしているのかえ?」・・・は?」

「そもそも六千年も昔の話じゃて、それも祖母から聞いた話さね。わらわは別に悲しんでいるわけでもなく、その悪魔を恨んでいるわけでもないよ」

さいですか。まあ、気にしていないのならそれでいい。しかし六千年とはスケールがデカイ。祖母から聞いたということは、海母も結構な歳　ギロリ　・・・つまり六千年前からエルフは砂漠に住み着いているということか。しかし一つ気になるな。

「なあ、悪魔っていったいどんな奴なんだ?」

今までで一番気になった単語、悪魔について興味を引かれつい聞いてしまった。しかし流石に話してくれないかもしれないな、なにせ大災害と呼ばれる事を起こした存在だ。

「なに、坊やもよく知っているよ」

「俺が知っている!?!?」

思わず大声で俺は聞き返してしまった。俺が知っている存在、今まで海母が話してくれた種族なのだろうか？いや、海母は”俺がよく知っている”と言った。まさか地球で言う悪魔や悪鬼の類と同じなのだろうか、いやこの世界での悪魔や悪鬼を俺は知らないし、地球では架空の生物だ。再び考え出した俺を見て、海母は一呼吸置いてその存在を語ってくれた。

「それはね、坊やと同じ人間だよ」

第二話 人と竜（後書き）

物語のヒント

海外の適応力

その手の職業の方なら、海外を渡り歩くうちにいつの間にか身に付いているであろうスキル。

ヤックデカルチャー セントラーディ語。

関心や興奮を伴いつつ、とても信じられない事態に遭遇した時に使用する。

「なんと（言う）」「を意味する「ヤック」、「信じられない、恐ろしい」を意味する「デカルチャー」という二つの単語で構成されている。

不変の魔法

原作でエルフのルクシャナが剣にデルフリンガーかけている精霊の力と同じ。
通用するのは物質のみ、生物には効果が無い。

この二次創作における”魔法”

オリ主が、精霊の力と系統魔法の区別をするのが面倒なので、二つまとめて”魔法”と呼ぶことにした。

今後、独自解釈や別の力、オリジナルの派生などが出てくるため、呼び方全て”魔法”または”魔術”とする予定。

ホグワーツ

某有名小説の魔法学校。

行けるのなら一度は行ってみたい。

武器・兵器

”海母の巢”付近のそれらは、風化と”とある理由”により殆ど使用不能。

シャイターンの門は、武器・兵器として機能する物のみを召喚している設定です。とある理由は話が進行すれば出てきます。

悪魔や悪鬼

空想上の存在。もしくは宗教用語。

人の「煩惱」や「悪」を表す言葉でもある。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9753y/>

ゼロの使い魔 ~ 異世界奔走記 ~

2011年12月2日17時54分発行